

Wed. Aug 30, 2023

RYB1

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成
をいかに効果的に行うか

Significance and problems of universities as bases
for the development of top athletes III: Focusing on
the connection of top athletes from high school to
university

Chair: Hirokazu Arai, Yosuke Tahara

1:50 PM - 3:50 PM RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

[競技スポーツ-SA-1] Physical changes of high school
athletes and characteristics of body
composition during growth spurt
*Makiko Shibata¹ (1. Thinking about the
present and the future of Athletes U
nsaku)

[競技スポーツ-SA-2] How to get involved with sports
during high school and college
*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of
Tsukuba)

[競技スポーツ-SA-3] The issue of sports recommendation
admissions to universities from the
point of view of pedagogy and history
of extracurricular sports activities
*Taku Kamiya¹ (1. Kansai University)

RY201

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに
良質なものにするか

A feasibility of the Social Mission in University
Physical Education, Sport and Health Sciences: How
to realize the mission

Chair: Kaori Kimura, Hiroshi Imashuku

1:50 PM - 3:50 PM RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

[学校保健体育-SA-1] A feasibility of the Social Mission in
University Physical Education, Sport
and Health Sciences: a summary of
the present stand from a perspective
of historical changes
*Koji Takahashi¹ (1. Nagasaki
University)

[学校保健体育-SA-2] Potential of University Physical
Education for Realization of Social
Issues
*Taro Obayashi¹ (1. University of

Tsukuba)

[学校保健体育-SA-3] Exploring the Guideposts for
University Physical Education
*Mitsuyoshi Murayama¹ (1. Keio
University)

RY301

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・
運動の在り方をいかに考えるか

Physical Fitness and Exercise from a Perspective of
Health Literacy

Chair: Masashi Asakura

1:50 PM - 3:50 PM RY301 (良心館3階 R Y 3 0 1 番教室)

[健康福祉-SA-1] School Health Education in Pre-Health-
Literacy Era
*Masayuki Takao¹ (1. Tokai University)

[健康福祉-SA-2] Health literacy in school-aged children
and its relationship to physical fitness and
exercise
*Masaru Ueji¹ (1. Ibaraki University)

[健康福祉-SA-3] Women's Health Education in Society 5.0
Era through Industry-Academia-
Government-Medical-Media Collaboration
Starting with "Measuring, Knowing, Fun
and Fashionable"
*Yuka Honda¹ (1. Graduate School of Media
and Governance, Keio University)

RY303

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決
に向けてスポーツから何が提案できるか

Is it possible to reduce social inequalities through
sports?

Chair: Tomoyasu Kondoh, Fumie Yamazaki

1:50 PM - 3:50 PM RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

[スポーツ文化-SA-1] Sport and Inequality in Australia:
Conflict and Sublation
*Masataka Ozaki¹ (1. The Open
University of Japan, Tokyo Tama Study
Center)

[スポーツ文化-SA-2] Inequalities and Possibilities in
Japanese-Peruvian Sports Networks
*Shun Ueta¹ (1. Tokai University)

[スポーツ文化-SA-3] Trends on International Cooperation
through Disability Sports

*Hanae Endo¹ (1. The Faculty of Health
and Sport Science)

RY305

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向け
た生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

**Toward building a lifelong sports policy and
collaborative system for the realization of an
inclusive society**

Chair: Kyosuke Uchida

1:50 PM - 3:50 PM RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

[生涯スポーツ-SA-1] Construction of a sustainable
cooperative system where inclusive
society and lifelong sports coexist

*Kyosuke Uchida¹ (1. Tokai University)

[生涯スポーツ-SA-2] How to secure people's sport right in
an era of centenarians?

*Takahiro Nakano¹ (1. Chukyo
University)

[生涯スポーツ-SA-3] Problems on Lifelong-sport and Study
of Taiiku

*Yosuke Hayashi¹ (1. Osaka Kyoiku
University)

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

Significance and problems of universities as bases for the development of top athletes III: Focusing on the connection of top athletes from high school to university

Chair: Hirokazu Arai, Yosuke Tahara

Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

競技スポーツ研究部会の課題Aでは、2021年度に「トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点」、2022年度には「トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅱ—トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目して—」というシンポジウムを開催した。2023年度はこれまでの議論を発展させ、「トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅲ—トップアスリートの高等学校から大学への接続に着目して—」というシンポジウムを開催する。

私立高校授業料の実質無償化制度が開始され、定員割れの私立大学が5割を超えようとする時代に、大学はどのように高校生アスリートを受け入れ、育成すべきか。トップダウンで進められようとしている「運動部活動の地域移行」に振り回されている高校生や、アスリートとして「コロナ・ネイティブ」の高校生にどう寄り添うべきか。指導者としての視点だけでなく、多様なアントラージュからの視点も大切に、高校生アスリートと大学の接続について、聖域なき議論を徹底的に交わしたい。

[競技スポーツ-SA-1] Physical changes of high school athletes and characteristics of body composition during growth spurt

*Makiko Shibata¹ (1. Thinking about the present and the future of Athletes Unsaku)

[競技スポーツ-SA-2] How to get involved with sports during high school and college

*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of Tsukuba)

[競技スポーツ-SA-3] The issue of sports recommendation admissions to universities from the point of view of pedagogy and history of extracurricular sports activities

*Taku Kamiya¹ (1. Kansai University)

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RYB1)

[競技スポーツ-SA-1] Physical changes of high school athletes and characteristics of body composition during growth spurt

トレーナーの視点から

*Makiko Shibata¹ (1. Thinking about the present and the future of Athletes Unsaku)

<演者略歴>

九州大学大学院人間環境学府／順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修了。博士（スポーツ健康科学）。元米国女子プロ野球、セミプロ野球選手（全米女子野球選手権優勝等）。指導者を経てトレーナーへ。2018年まで久恒病院勤務。プロ野球選手、大相撲力士、JLPGA選手、ジュニアアスリート等を担当。

「トップアスリートの高等学校から大学への接続」を実現するために、高校生アスリートが大学進学後の自らの活躍を自負できるかが挙げられるのではないかと考える。そして、この自信を持つためには競技に打ち込むためのフィジカルの強さが関与すると考える。このことは成長期に、いかにスポーツ障害を発症することなく過ごすことができたかとも言い換えられる。代表的なスポーツ障害の一つである疲労骨折は、男女とも16歳が発症のピーク、疲労骨折の発症は長期の競技離脱を余儀なくされることがあると報告されている。特に、女子アスリートにおいては、アメリカスポーツ医学会が利用可能エネルギー不足は無月経や骨粗鬆症の起点となることや、無月経もまた骨粗鬆症の発症に影響を与えることに警鐘を鳴らしており、骨粗鬆症の発症は二次的な疲労骨折の原因となり得る。

日本人成長期女子アスリートを対象とした体組成を検討する研究において、身長、除脂肪量、骨量の順でピークが観察された。これは日本人中学生男子サッカー選手を対象とした研究と同じ結果であり、疲労骨折などスポーツ障害の予防は、成長スパート開始以降に、いかに体組成のピークを迎えられるかが重要であると考えられる。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RYB1)

[競技スポーツ-SA-2] How to get involved with sports during high school and college

Perspectives from faculty members in charge of athletic clubs

*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育専門学群卒業、同大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了。大阪工業大学助手、講師、准教授を経て、2014年より現職。博士（教育学、九州大学）。筑波大学体育スポーツ局大学体育部門長、硬式野球部長。首都大学野球連盟理事。全国大学体育連合常務理事、研究部長。日本スポーツ体育健康科学学術連合監事。

競技とそれ以外の生活の調和を表す「スポーツ・ライフ・バランス」（荒井ほか、2018）。これを実現する学生アスリートの育成は、大学スポーツ界にとどまらず高等教育全体の課題、さらには社会的課題とさえ言える。近年発覚した東京五輪汚職事件などは、スポーツとの関わり方を見直すべき対象が、アスリートやその指導者限定のはずがないことを示している。私たちスポーツ関係者は、スポーツが人や組織、地域や国を育てる力を持っていると信じているものの、それを裏づけたり効力を高める方略については、十分な知見集積に至っていない。

シンポジウムでは、学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスの実現へ向けた展望と現状について論じる。具体的には、現場で指導する監督・コーチではなく部長という立場で約30年、大学スポーツに関わってきた私自身の体験と、これまでの限られた学術的な知見の整理を試みる。スポーツといかに関わることが人としての

成長につながるのか、幸せにつながるのか、社会の発展につながるのか。参加者のみなさんとともに考えたい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RYB1)

[競技スポーツ-SA-3] The issue of sports recommendation admissions to universities from the point of view of pedagogy and history of extracurricular sports activities

運動部活動の歴史と教育論の視点から

*Taku Kamiya¹ (1. Kansai University)

<演者略歴>

筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士（教育学）。

岐阜経済大学（現在、岐阜協立大学）、宮城教育大学を経て現職。

日本部活動学会会長、日本体育科教育学会理事。

本シンポジウムで掲げる「トップアスリート養成の拠点としての大学」や「トップアスリートの高等学校から大学への接続」を実現する教育制度がスポーツ推薦入試である。それは、1980年代に国策として大学運動部の強化が進められたことを背景に、各大学において制度化が進み、日本の競技力向上を支えてきた。

しかし、以下に見る3つの点において転換期を迎えている。まず、①競技成績に特化した評価が、勝利至上主義的な部活動運営の原因になってきたことがある（歴史的課題）。次に、②国が示す「大学入学者選抜実施要項」において、これまでの競技成績に特化した選抜を改め、各大学のアドミッションポリシーと関連づけて部活動のプロセスを評価することが求められている（教育制度的課題）。最後に、③競技成績の評価と大学における学びのミスマッチが指摘されており、運動部活動とキャリア形成の関係が問われていることがある（教育内容的課題）。これらの課題をふまえて、本報告では部活動を自治と社交の場として捉える「運動部活動の教育学」の立場から、大学の学びと関連づけたスポーツ推薦入試の在り方と、キャリア形成につなげる部活動の考え方を示したい。

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

A feasibility of the Social Mission in University Physical Education, Sport and Health Sciences: How to realize the mission

Chair: Kaori Kimura, Hiroshi Imashuku

Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

本シンポジウムでは、課題である「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定している。3年目のテーマは「大学体育の社会的使命をいかに実現させるか」である。この課題に迫るために、1年目と2年目のシンポジウム及び研究発表から得られた知見を総括（高橋氏、大林氏）し、未来の大学体育を展望（村山氏）する。大学体育の社会的使命を実現させるためには、中教審答申『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』（2018年）のみならず、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』（2021年）や内閣府『Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ』（2022年）も踏まえながら、高等教育における教養教育の一科目として大学体育を位置づける必要がある。さらには、文部科学省『地域連携プラットフォーム構築に関するガイドライン』（2020年）が示しているように、高等教育機関を含めた社会から必要とされる大学体育授業を探究し、その目標や目的、学修方法、評価についても明確にする必要がある。最終年度となるため、シンポジウム全体の総括も含めてまとめたい。

[学校保健体育-SA-1] A feasibility of the Social Mission in University Physical Education, Sport and Health Sciences: a summary of the present stand from a perspective of historical changes

*Koji Takahashi¹ (1. Nagasaki University)

[学校保健体育-SA-2] Potential of University Physical Education for Realization of Social Issues

*Taro Obayashi¹ (1. University of Tsukuba)

[学校保健体育-SA-3] Exploring the Guideposts for University Physical Education

*Mitsuyoshi Murayama¹ (1. Keio University)

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY201)

[学校保健体育-SA-1] A feasibility of the Social Mission in University Physical Education, Sport and Health Sciences: a summary of the present stand from a perspective of historical changes

*Koji Takahashi¹ (1. Nagasaki University)

<演者略歴>

千葉大学卒、上越教育大学大学院修了、東京学芸大学連合大学院修了〔博士（教育学）〕。大阪産業大学を経て2013年10月から長崎大学教育学部／人文社会科学域准教授。日本体育・スポーツ哲学会理事、九州地区大学体育連合理事、日本体育・スポーツ・健康学会応用（領域横断）部会学校保健体育研究部会長。

本発表では、1年目のシンポジウム及び研究発表に基づきながら、大学体育の社会的使命とその実現可能性を検討する。シンポジウムでは、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史の変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究した。その内容は SoTL等を用いた大学体育の知見の集積方法及びその意義、大学教育の目的や授業実践と授業者の研究者としての態度との関係、共通した大学体育の社会的使命の設定についての是非及び高校までの体育・保健体育と生涯スポーツとの繋がりを作る大学体育の意義であった。研究発表では、大学体育における学修者主体の授業への転換に必要な目標設定、オンラインによる体育実技授業の改善方法の提示、オンラインと対面を併用した「主体的な学び」のための工夫点、コロナ禍の大学体育における授業デザイン、大学体育授業におけるアクティブラーニングを取り入れたより深い学びに対する有効性、コロナ禍における大学体育の授業の目標到達度や身体不活動時間とライフスキル等との関連から客観的評価と効果の検証について報告がなされた。以上の総括から未来の大学体育を描き出した。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY201)

[学校保健体育-SA-2] Potential of University Physical Education for Realization of Social Issues

*Taro Obayashi¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育専門学群卒、同大学院修了（博士：体育科学）。ギリシャ・ペロポネソス大学大学院修了。日本学術振興会特別研究員（DC2）を経て2017年度より現職（筑波大学体育系助教）。国際体育・スポーツ史学会（ISHPES）若手研究者代表委員、NHK大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺」時代考証（スポーツ史）など。

本発表では、2年目のシンポジウム・研究発表の成果に基づきながら、主題となる大学体育の社会的使命と実現可能性について検討したい。シンポジウムでは、現代的課題の一つとして「共生社会の創造」を念頭に、多様性の理解を促進するという観点から①聴覚・視覚障害学生のための大学体育、②ジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた大学体育、③有形・無形文化財を活用した大学体育の拡がりについて議論した。研究発表では、専門領域の垣根を越えたプレゼンテーションが展開され、例えば大学体育を通したコロナ禍の大学生の心身フィットネスの向上、将来的な医療費・介護費の削減への社会的影響、ジェンダー・スタディーズなどをキーワードとしたディスカッションが展開された。本発表では主に以上の内容に関するまとめを試み、現代的課題と関連させながら今後の大学体育の可能性に関する議論につなげていきたい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY201)

[学校保健体育-SA-3] Exploring the Guideposts for University Physical Education

Towards 2040

*Mitsuyoshi Murayama¹ (1. Keio University)

<演者略歴>

順天堂大学体育学部卒、同大学院（体育学研究科・スポーツ健康科学研究科）修了（博士：スポーツ健康科学）。1992年慶應義塾大学体育研究所に助手（嘱託）として奉職。2012年より教授。公益社団法人全国大学体育連合理事（総務部長：2011-2015年、将来構想委員長2021年～現在）

2018年に中央教育審議会は「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」を答申し、Society5.0時代に向けて教育改革の指針を示した。また、2040年には我が国の20-65歳の生産者人口の激減と75歳以上の人口再増加という超々高齢化社会の到来が予測されている。本発表ではこの2040年という近未来の大学体育を展望するとともに、進むべき方向・乗り越えるべき課題について検討したい。主な観点は、VUCA時代に求められる“資質・能力”の育成や各大学のポリシーの実現に対する大学体育の役割と価値、高大連携としての初等中等教育からの教材・教育手法・評価方法などの一貫性および大学の独自性、“体育教育”の持つ普遍性と時代性（DX・ICT・AIなど）の検証、大学体育の担い手の育成や大学体育研究とスポーツ科学研究の関係性、などである。いずれも、社会の変化に対応するための大学改革の課題と連動し、複雑で多様な道を進まねばならないであろう。個々の大学や教員の知恵と力を結集し、本学会を含めた組織的な取り組みによって、その道標を立てていく必要があると考える。

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

Physical Fitness and Exercise from a Perspective of Health Literacy

Chair: Masashi Asakura

Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY301 (良心館3階 R Y 3 0 1 番教室)

本部会では「ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方」という上位課題に対して、過去2年間にわたって「女性」の健康やスポーツをめぐる課題を議論してきた。今年度はその蓄積を踏まえ、近年、重視されているヘルスリテラシー概念をキーワードに、人々が生涯にわたって自らの「健康」について考え、実践していくための諸条件や環境づくりの重要性を議論していく。同概念は「良好な健康状態の維持、増進のために必要となる情報にアクセスし、理解し、活用する個人の意欲や能力を決定づける認知と社会的スキル」（ドン・ナット・ビーム）と言われるように、近年の情報技術革新とそれに伴う健康情報の氾濫に関わっており、識字能力のみならず、情報の取捨選択から理解、判断・活用までを射程に入れている。ヘルスリテラシーが十全に機能するには、個人的なスキルのみならず、教育や医療等の制度的環境づくりや情報発信のあり方等、様々な対策が求められる。さらに情報へのアクセスやその社会的認知という点で、ジェンダーの視点が重要であることも強調されるべきである。以上の諸課題に対して保健科教育、健康科学、社会学を専門とする登壇者と多角的な議論を展開する。

[健康福祉-SA-1] School Health Education in Pre-Health-Literacy Era

*Masayuki Takao¹ (1. Tokai University)

[健康福祉-SA-2] Health literacy in school-aged children and its relationship to physical fitness and exercise

*Masaru Ueji¹ (1. Ibaraki University)

[健康福祉-SA-3] Women's Health Education in Society 5.0 Era through Industry-Academia-Government-Medical-Media Collaboration Starting with "Measuring, Knowing, Fun and Fashionable"

*Yuka Honda¹ (1. Graduate School of Media and Governance, Keio University)

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY301)

[健康福祉-SA-1] School Health Education in Pre-Health-Literacy Era

*Masayuki Takao¹ (1. Tokai University)

<演者略歴>

東海大学体育学部准教授。筑波大学大学院人間総合科学研究科満期退学。博士（体育学）。東洋大学助教、東京理科大学助教を経て現職。日本スポーツ社会学会理事。専門はスポーツ社会学、統治性論。現在は、主にスポーツ・メガイイベントや、スポーツや健康と親密圏の関係性について研究をしている。

近年、生理のための衛生用品や教育、衛生施設、そして廃棄方法に対して十分にアクセスできない状態が「生理の貧困（Period Poverty）」として問題視されている。とりわけ、新型コロナウイルス感染症の拡大は、小売業や飲食業などの女性従業員比率の高い職場での失業や収入減をもたらすとともに、この問題が途上国だけのものでないこと、健康的な生活を送る条件においてジェンダーによる差異があることも顕在化させた。健康をめぐる科学的認識と実践的能力の発達を謳う保健科教育において、こうした「女性」特有の健康問題は、これまでどのように、あるいはどの程度、取り上げられてきただろうか。本報告では過去から現在までの保健科の教科書における月経の記述を分析し、その歴史と現在を確認する。それを踏まえた上で、知識の実践性を強調するヘルスリテラシー概念が、今後、十全に機能するための諸条件について考察してみたい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY301)

[健康福祉-SA-2] Health literacy in school-aged children and its relationship to physical fitness and exercise

*Masaru Ueji¹ (1. Ibaraki University)

<演者略歴>

茨城大学教育学部教授。筑波大学大学院医学研究科修了。博士（医学）。筑波大学助手、茨城大学准教授を経て現職。日本保健科教育学会理事・会長。日本学校保健学会理事。日本健康教育学会理事。専門は学校保健、保健科教育、公衆衛生学、疫学。現在は、主に保健授業の実践研究に取り組んでいる。

ヘルスリテラシーは概ね「健康情報を入手し、理解し、評価し、活用するための能力」と定義されている。子供たちの健康課題の多様化、複雑化に加え、ICTの活用が進む教育現場の状況に鑑みると、ヘルスリテラシーの育成は喫緊の課題と言えよう。そのことは、学習指導要領実施状況調査（国立教育政策研究所）の結果にも表れており、各校種で次の課題が指摘されている。○小学校：図を読み取り健康情報を分析すること。○中学校：健康に関する抽象的な内容を具体的な事象に適用したり応用したりすること。○高等学校：個人の健康の保持増進と社会環境づくりを関連付けること。これらをヘルスリテラシーの定義に沿って解釈すると、小学校では「健康情報を理解し、評価すること」、中学校では「健康情報を活用すること」、高等学校では「知識を統合化し、より深い概念を理解すること」に課題があると考えられる。

本発表では、子供たちのヘルスリテラシーを育成する手立てとともに、そのことが体力や運動とどのように関わるのか考察したい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY301)

[健康福祉-SA-3] Women's Health Education in Society 5.0 Era through Industry-Academia-Government-Medical-Media

Collaboration Starting with "Measuring, Knowing, Fun and Fashionable"

*Yuka Honda¹ (1. Graduate School of Media and Governance, Keio University)

<演者略歴>

女性健康医学者・博士（医学）。1997年順天堂大学スポーツ健康科学部卒業後、(株)タニタで体組成計や睡眠計を開発。在職中、東京大学大学院医学系研究科母性看護学・助産学分野研究員として女性健康科学を研究。現在は、慶応大SFCや産婦人科で産学官連携のFemtechやユースヘルスケア・プラットフォームの開発・研究を行う。

日本は妊産婦死亡率、周産期死亡率ともに低率で世界で最も安全なレベルの体制を提供している一方、少子化問題や、若い世代の望まぬ妊娠のための人工中絶、高齢化に伴う不妊治療数の増加が諸外国に比較し多い。さらに、痩せた女性が増え、低体重体重児（2,500g未満）も増加していることから、慢性の非感染性疾患（NCDs）のリスクを負う子どもが増加している。これらの問題は、健康教育の根底となる生物・進化学・形態学のみならず、性と生殖に関する教育の国際標準への未到達と、それに伴うヘルスリテラシーの低さが要因の一つではないかと考えている。現在、私は、これらの改善に有用な健康教育プログラムの検討をしている。シンポジウムでは、現在、我々が開発しているエンターテインメントや体操の要素を取り入れた産学官医・メディア連携の「はかる・知る・楽しむ・おしゃれ」から始まる女性の健康教育プログラムや Femtechライナーの一部。さらには、「個の予防」の視点で胎児期から成人期へ繋がる切れ目のないソサエティ5.0のユースヘルスケア・プラットフォーム構想について紹介し、これらが体力・運動に与える影響や健康・福祉分野への展開の可能性について議論したい。

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

Is it possible to reduce social inequalities through sports?

Chair: Tomoyasu Kondoh, Fumie Yamazaki

Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本シンポジウムは「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」といった上位課題の最終年（3年目）の企画である。今年度は「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」と題して国内外で見られる社会的な不平等をテーマにして議論を進めていく。その際、2つの視点を踏まえながら議論をしていく予定である。1つ目は、社会的に存在する種々の不平等に対して「スポーツを通して」一定の解決や是正を探ろうとする視点である。ここでは、スポーツが社会問題を解決するための手段としての位置づけになる。2つ目は、スポーツ事象の中で生じている不平等を解決しないしは是正していく視点である。この2つの視点は対立するものではなく、視点と視点との間に様々な事例が見られている。ここでは、こうした事例の紹介・議論を通じて、本テーマである「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」に迫っていく。なお、今回主に取り上げる事例としては、「先住民」「移民」「障害者」等である。また、本シンポジウムでは、国内外での調査を通じて、多数の事例に精通されている3名の研究者を招聘しており、会場の皆様と共に深い議論ができればと考えている。

[スポーツ文化-SA-1] Sport and Inequality in Australia: Conflict and Sublation

*Masataka Ozaki¹ (1. The Open University of Japan, Tokyo Tama Study Center)

[スポーツ文化-SA-2] Inequalities and Possibilities in Japanese-Peruvian Sports Networks

*Shun Ueta¹ (1. Tokai University)

[スポーツ文化-SA-3] Trends on International Cooperation through Disability Sports

*Hanae Endo¹ (1. The Faculty of Health and Sport Science)

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY303)

[スポーツ文化-SA-1] Sport and Inequality in Australia: Conflict and Sublation

*Masataka Ozaki¹ (1. The Open University of Japan, Tokyo Tama Study Center)

＜演者略歴＞

一橋大学、同大大学院を経て一橋大学大学院社会学研究科教授。現在、一橋大学名誉教授、放送大学東京多摩学習センター所長・特任教授。研究テーマは、スポーツ政策（とくに、人々のスポーツ参加に関する政策）、地域のスポーツ実践、オーストラリアの社会とスポーツ。

オーストラリアの社会には「主流」のアングロ＝ケルティック系の人々と移民や先住民との間に不平等が長く、そして根深く横たわっていたが、1970年代、政治主導で「白豪主義」から多文化主義に舵を切った。その後の道のりは決して平坦ではなかったとはいえ、現在に至るまでの彼の地の経験は今後への示唆を多く含んでいる。では、オーストラリアのスポーツは不平等にどのように向き合ってきたのだろうか。結論的に言えば、社会と同様に跛行的な道筋をたどり、かつ社会の動きに同期するばかりではなく時に逆のベクトルを示すことすらあった。本報告では、相互扶助の基盤としての移民コミュニティ、その場でのスポーツ活動が民族アイデンティティの拠り所であったが、そのことが「移民のスポーツ」としてサッカーが色眼鏡で見られる一因となったこと。オーストラリアン・フットボール・リーグの競技の場で人々の差別意識とその対抗が可視化され差別禁止条項の制定につながった事例などを取り上げる予定である。社会の不平等に対してスポーツではできないこと、スポーツだからこそ可能なこと。両者を截然と切り分けることは難しいが、その割り切れなさをも含み込んだ議論としたい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY303)

[スポーツ文化-SA-2] Inequalities and Possibilities in Japanese-Peruvian Sports Networks

*Shun Ueta¹ (1. Tokai University)

＜演者略歴＞

横浜国立大学、筑波大学大学院を経て、現在、東海大学国際文化学部講師。専門はスポーツ社会学。近年の主な研究テーマは「エスニシティとスポーツ」（スポーツを通じた日系南米人のネットワーク形成）と「視覚障害者のスポーツ」（ブラインドマラソンにみる障害者－健常者関係）。

「定住者」という在留資格が新たに設けられた1990年の入管法改正以後、現在に至るまでいわゆる「日系人」の南米からの移入が続いている。来日の目的が、移入現象が見られ始めた当初の「帰国を前提とした短期的労働」（＝出稼ぎ）から次第に「日本での長期的滞在・定住」へと変化する中で、日系南米人たちが日本での生活において直面する問題もまた変化してきた。中でも、日本における調整弁的労働力としての構造的な位置づけと、所帯をかまえ家族を養育するために「日本の生活」に同期を図り安定化させていかなければならないことと、いつか実現するかもしれない母国への帰還のために文化的・言語的な備えをもしなければならないという、相矛盾する複数の生活課題の調停は、彼らにとって重要な問題として定位し続けている。本報告では、この問題に対して同じサッカーチームのファンであることを共通項としてサークルを全国各地で形成し、それぞれをネットワークでつなぎ合わせることで対処している日系ペルー人たちの事例を取り上げる予定である。当該実践の背景にあって彼らが日本での生活において直面している問題を浮き彫りにしつつ、スポーツがもつ意味について議論したい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY303)

[スポーツ文化-SA-3] Trends on International Cooperation through Disability Sports

Expectations and Issues

*Hanae Endo¹ (1. The Faculty of Health and Sport Science)

<演者略歴>

早稲田大学スポーツ科学研究科博士後期課程修了後、現職に至る。日本財団パラスポーツサポートセンター・パラリンピック研究会研究員を兼職。研究テーマは、スポーツを通じた国際開発、スポーツ政策。

近年、国際社会として「障害」の問題を捉え、障害者の選択肢拡大と権利向上が目指されている。障害者差別を禁ずる法律や条約の制定など、各国における障害に関する権利保障制度の進展に影響を受け、障害者スポーツも福祉政策からスポーツ政策への移管が進められている。現在では先進諸国のみならず、東南アジアやアフリカ地域など一部の途上国地域においても障害・非障害問わずスポーツ政策として公的サポートを得られるような体制整備が進められている。この政策的な変化を後押しするために、競技団体や各国政府、NGOらによって途上国地域に対する障害者スポーツに関する国際協力事業も行われている。パラリンピックなど障害者スポーツ国際大会の参加国・地域数の増加している一方、特に後発開発途上国にとっては国際大会への出場自体も困難である状態が続いていることを鑑みると、スポーツ参加をめぐる国際的な二極化構造は依存として深刻であり、また途上国内部においても格差が生じていることが考えられる。障害者スポーツ振興は、個人・集団・社会に障害に関する不平等是正に期待が寄せられているが、実際にどのような影響を及ぼしうるか、また限界性は何か議論したい。

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

Toward building a lifelong sports policy and collaborative system for the realization of an inclusive society

Chair: Kyosuke Uchida

Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

これまで生涯スポーツ研究部会では、2021年の開設以来、以下の3つのテーマについて継続し検討を重ねてきた。本研究部会は、最終的には政策提言に向け下記課題に対する回答を目指し議論を深めてきた。

課題A：「共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか」

課題B：「生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか」

課題C：「人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」

昨年度の学会大会中に本部会ではミーティングを行い、生涯スポーツをテーマに議論を深めるなかで、我が国には、生涯スポーツの実施や保障に、問題や課題があることを多く確認してきた。このことは、それぞれのシンポジウムの中で深化し、課題Aでは、協働システムを構築することができていない「障壁」は何かを提示できるのではないかということ。課題Bでは、「子どもたち」「Well-Being」「スポーツ」の三者をどのように関連付けて考えていけばよいかについて。さらに課題Cでは、様々な対象におけるスポーツ権、つまりはスポーツの価値の多様性に対応していくための政策を立案していくための共進が必要ではないかという考えに至っている。

本シンポジウムは、これまでの応用研究部会で得られた知見の整理を目的としている。

[生涯スポーツ-SA-1] Construction of a sustainable cooperative system where inclusive society and lifelong sports coexist

*Kyosuke Uchida¹ (1. Tokai University)

[生涯スポーツ-SA-2] How to secure people's sport right in an era of centenarians?

*Takahiro Nakano¹ (1. Chukyo University)

[生涯スポーツ-SA-3] Problems on Lifelong-sport and Study of Taiiku

*Yosuke Hayashi¹ (1. Osaka Kyoiku University)

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY305)

[生涯スポーツ-SA-1] Construction of a sustainable cooperative system where inclusive society and lifelong sports coexist

*Kyosuke Uchida¹ (1. Tokai University)

＜演者略歴＞

東海大学体育学部体育学科 教授。筑波大学体育科学研究科修了。修士（体育学）。筑波大学附属ろう学校（現：聴覚特別支援学校）、筑波大学附属中学校保健体育科教員として勤務。2005年より現職に着任。アダプテッド・スポーツ科学を中心に研究。「教養としてのアダプテッド体育・スポーツ」（2018 大修館書店）

これまで課題 A では、「共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか」というテーマに対し、パラダイムチェンジの必要性和スポーツの見方を変え広げる必要性を確認してきた。これまでの議論を踏まえると、共生社会と生涯スポーツは、例えばスポーツボランティアが広がり、“支えるスポーツ”というスポーツの見方が定着するというパラダイムチェンジが起きれば、持続可能であることが明らかになったと考えている。

現に東京2020オリンピック・パラリンピック大会では、障害当事者のボランティアが Diversity&Inclusion を促進し、ソフトレガシーにつながることも確認されている。しかし持続可能という点では、支え手となる人たちの交代が進まず高齢化や、障害ごとに起きる問題への丁寧な対応、異なる価値観からボランティアを論じる必要性など、多数派中心の価値からの転換がなければ持続しないことも明らかになってきた。

本発表はこれまでの議論で具体的に挙げられた、共生社会が実現しているシステム（イベント、スポーツ大会）をまとめ、持続可能な協働システムの構築に向けた課題や方策について議論していきたい。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY305)

[生涯スポーツ-SA-2] How to secure people's sport right in an era of centenarians?

*Takahiro Nakano¹ (1. Chukyo University)

＜演者略歴＞

筑波大学体育科学研究科修了。博士（体育科学）。名古屋学院大学教授を経て2021年4月より中京大学スポーツ科学部教授。2010~11:Indiana University 在外研究員。現在は、スポーツ庁の体力、運動能力、運動習慣等調査有識者委員会委員長などを務め、子どもの運動促進や体力向上、運動の社会、教育的効果などについて研究。

これまで、生涯スポーツ部会課題 C では、スポーツ権の補償というテーマに対し、子ども、高齢者、中年などの年代区分、女性、障害者、元アスリートなどの背景の違いによるスポーツ実施の現状と課題を検討してきた。その中でスポーツに対する価値が多様であり、また、以前に比べて価値自体が変化してきている様子も見られた。例えば、高齢者では健康増進を主題としたものが多いが、子ども世代では、近年は体力向上や健康増進よりも、人間力や教育といったより根源的な子どもの成長へのスポーツの貢献が議論されてきている。女性や障害者では、パーソナリティや障害の程度による違いや障害者同士のつながりを大事にするなどの特有の価値も示された。また、元アスリートではスポーツを再定義することの必要性が示され、みんなのスポーツやユニバーサルスポーツといった枠組みでは、運動嫌いへの対応やセミフォーマルなスポーツとしての位置づけが示されるなど、スポーツの価値が一様ではなく、様々な価値を理解し、それに応える取り組みが必要であることが示されてきた。そこで、本発表ではこれらを整理し、これまでの公共施策で見直すべき点や我々研究者がそのために示していくべきエビデンスなどについて議論をしていきたいと思う。

(Wed. Aug 30, 2023 1:50 PM - 3:50 PM RY305)

[生涯スポーツ-SA-3] Problems on Lifelong-sport and Study of Taiiku Sport, Health, and Well-Being

*Yosuke Hayashi¹ (1. Osaka Kyoiku University)

<演者略歴>

大阪教育大学教育学部保健体育部門・准教授。単著に『体育の学とはなにか』（道和書院、2023年）、『デカルト哲学と身体教育』（道和書院、2014年）ほか。2021年日本体育・スポーツ・健康学会学会賞、日本体育学会浅田学術奨励賞、日本体育学会・学会大会若手研究者奨励賞、身体運動文化学会若手研究者奨励賞ほか。

本報告では課題 Bの3年にわたる歩みを総括する。具体的には「子どもたち」「Well-Being」そして「スポーツ」を鍵語として進めてきた議論の軌跡を確認し、未来への指針を検討する。さらに、領域横断部会が体育学の全領域を巻き込む活動である以上、体育学の現在と未来の在り方にも視界を拓く論じ方が必要となろう。手がかりがある。数種にのぼる日本学術会議の健康・スポーツ科学委員会による提言文書を繙こう。子どもの発育発達に対する研究者の強い関心、より完成された「健全」の実現に向かう研究と科学エビデンスの確保、そして政策学の言説により研究成果を広く発信する姿勢がこの文書より確認できる。翻って「生涯スポーツ部会」課題 Bの3年を回顧するとき、生活のなかのスポーツ環境をいかに整備・享受・活用するかといった課題に継続した関心を向けて来たことが明らかである。これら双方を踏まえ、身体教育としての体育（PE）や学校内外のスポーツ活動、さらに健康増進のための軽運動（エクササイズ）といった身体活動の総体の先に見晴るかす「ウェル・ビーイング」の実質をわれわれはいかに構想し、いまどう考えるのか。フロアの見識にも教わりつつ討議を深めたい。